

熊毛地区 社会教育委員だより

平成27年2月発行
熊毛地区社会教育
委員連絡協議会

九州大会に参加して

熊毛地区社会教育委員連絡協議会

会長 中野 幸太郎

熊毛地区社会教育委員の機関紙として、各委員待望の熊毛地区社会教育委員だより第二十八号が地区委員の御協力により刊行できますことを心からお喜び申し上げます。

平成二十六年度は、県教育委員会にとりまして、多忙を極めつつも、実りのある最高の年ではなかったかと思えます。

八月には、九州各県の公民館関係者が一堂に会し、第六十五回九州地区公民館研究大会鹿児島大会が開催されました。

一日目の分科会では、「豊かな地域づくりを担う自治公民館の在り方」を協議テーマとした第五分科会に西之表市からも地区公民館長六名が参加しました。二つの地区の事例発表に対して、質問や意見交換が活発に行われ、熱のこもった研究協議となりました。宮崎県教育庁生涯学習課副主幹から、『自治会長』は行政との連携を密にし、住民が安心して生活できるようにすることが役割であり、『公民館長』は地域住民のコミュニティの拡充を図りながら地域の感性を高め、更に住民の絆を

深めて公民館を地域の拠点として活動することが役割である。」という助言を聞き、自分の立場を再考することができました。

二日目の全体会での第三十六代木村庄之助氏の「努力すれば夢は叶う」と題した記念講演では、大相撲の世界での喜怒哀楽と人生の歩みをうたった相撲甚句に感銘を受けました。

また、十一月には、第四十四回九州ブロック社会教育研究大会鹿児島大会が開催され、西之表市から社会教育委員六名が参加しました。

私は、この大会に熊毛地区代表実行委員として加わり、大会当日の午前中に理事会・理事會運営委員会、分科会打合せ会を経て、午後からの全体会に臨みました。参加者を会場に案内し、見送るまでが主な仕事でしたが、鹿児島に良い印象をもってもらおうと他委員と共にできる限りのおもてなしに努めました。

二日目の分科会では、第二分科会会場の実行委員会の総括責任者という大役を仰せつかり、無事開会の挨拶を終えることができました。

このような大きな大会に携わり、主催者の苦勞が身に沁みて分かりました。一年前から数回にわたる実行委員会を開催し、大会当日を迎えるまでの県教育委員会の皆様の御努力と、当日の最終打合せ会では、遺漏のないようにと細部にわたる的確な指示・指導があったからこそ、大会が円滑にそして盛大に挙行されたものと思えます。

私は、この大会の実行委員として働かせていただいたことを誇りに思うとともに、改め

て人間は一生勉強するものだと再確認いたしました。



第四十四回九州ブロック社会教育研究大会
鹿児島大会に実行委員として参加（右が中野会長）

地域力で子どもたちの育成を

西之表市PTA連絡協議会

会長 高石 心平

西之表市PTA連絡協議会は、十一の小学校、種子島中学校、種子島高校のPTAで組織する団体です。

どこの地域でも抱えている課題であるとは思いますが、少子化、過疎化により地域に子どもが少なくなり、伝統芸能の継承や地域行事の存続が難しくなっています。

学校行事においてもPTA戸数の減少から校区やOBなど地域の方々との連携があつて、活動を存続することができています。

その主な例は、運動会です。以前は、小学校・中学校・校区がそれぞれ単独で行っていたものが、中学校の統合や児童数の減少により、現在はほとんどの小学校が校区と合同での開催となっています。競技への参加はもち

ろん、運営・進行まで地域の皆さんと小中高生が一緒になって取り組んでおり、文字通り老若男女が集う地域の一大イベントになっていきます。

このように少子化・地域の過疎化は大きな問題であるものの、一人一人の子どもの育成という点で見ると、核家族が多い現代において、早い時期から、地域の先輩や高齢者と密な時間を過ごすということは、極めて貴重なことであり、教育的にも大きな意義があると思います。



門松づくりの様子

平成二十一年に統合された種子島中学校においても、小学校区でできた流れをそのまま生かしていこうと、おやじ・おふくろの会が中心となり、OBや地域の皆さんと一緒に、体育祭時の緑門づくりや正月の門松づくりを行っており、地域一体となって子どもたちを見守っていこうという環境ができています。

校 区 長 を 努 め て

中種子町社会教育委員 玉城 孝一
定年退職後のんびりしていたところ、校長の依頼があり、深く考えずに受けたのだが、

自治公民館連絡協議会会長、社会教育委員会会長という重責まで負うことになり、各種会議への出席が多くなりました。

これまで社会教育活動というものにあまり関わったことがなく、どういったことをするのか戸惑いがありました。

そういった中で、町、地区、県、そして九州ブロックといった社会教育委員協議会及び研修会・自治公民館関係研修会等に出席させて頂くうちに、少しずつ役割等が分かるようになりました。それは研修会に参加して、色々な地域の活動事例発表を聞く中で、活動を行うにはすぐれたリーダーがいるということでした。

昨年、校区の自治公民館長及び役員で金峰町の「白川ふるさと道サポーター隊」の視察研修を行いました。この地区は旧鉄道敷地線路の跡地を借りて花壇を整備して地区総出で植栽を行い、花見など催事を開催して地域のコミュニケーションを図っていました。

この視察を終えて、中種子町のある一グループが国道沿いの荒れていた街路園に花を植えきれいな花壇となし、通行人の目を癒やしてくれています。視察研修を通じて、こうしたきっかけを基に音頭を取ってくれる人が出て来ることは大変喜ばしいことです。



街路園での花壇づくりの様子

現在、各種団体の役員のなり手がなく、役員捜しに苦労しています。昔ほどの集落にもあった老人クラブ・婦人会組織が無いところが増えています。少子高齢化・過疎化の中で、活動の中心となる人が少なくなっている今であるからこそ、各世代でのリーダーの育成が大事であると思っております。

校 区 の 「 ま と ま り 」 は ナ ン バ ー ワ ン

中種子町社会教育委員 平石 洋一
岩岡小学校に赴任して三年目になる。赴任する時から「岩岡は良いところだよ。何と言ってもまとまりがある。」と聞いていたが、やはり皆さんの話は嘘ではないと思った。岩岡の自慢はいくつかあるが、その中でもやはり凄いと思ったことは、中種子町内一周駅伝大会で過去に二十回優勝経験があることだ。その記念碑が校庭の一角に建っている。その石碑には、「昭和五十年



優勝記念碑

に岩岡親子駅伝大会をきっかけに、昭和五十二年に町内一周駅伝大会が上地区と下地区に分かれて始まり、見事上地区下地区とも優勝を飾り、これを皮切りに平成十二年までに通算二十回優勝した。」と書かれている。これほどまでに何故優勝できるものかと考えてしまふ。もちろん地域に素晴らしい選手がいることも当然のことだろうが、私の思うところ、

それを支える「まとまり」がそこにあるからではないだろうか。

もう一つ岩岡校区の凄いと思ったことがあ
る。それは各集落の敬老会に出席して思った
ことだ。大概どの集落でも敬老会で余興を
しているが、岩岡校区の敬老会の余興はひと
味ちがう。例えば敬老の方々に芯から喜んで
頂くために、大人も子どもも真剣に出し物を
演じる。例えばそれが少々ふざけたものであつ
てもしっかりと演じることだ。それが観る人
の心を打つ。これにも岩岡校区の「まとまり」
を感じる事ができる。こういった「まとまり」
は小さい校区だからできるとつい考えが
ちだが、やはり先輩たちが後輩たちに、しつ
かりと伝承しているからではないだろうか。

今離島はどこも過疎化が進み、若者が減り
高齢者が増え限界集落がほとんどである。何
とかこの現象をくい止めることはできないも
のかと考える。岩岡校区のよさである「まと
まり」を武器に若者が一人でも増えていくこ
とを願いたい。

ネット社会を正しくたくましく生きる

南種子町社会教育委員 柏原 浩一
「教育の情報化」の進展は、多様な学習形態
を実現する。本町においてもICTの導入が
進み、各校で積極的な活用を推進しているこ
ろである。

しかし一方では、疑似体験の増加による直
接体験の減少、コンピュータとの対話に頼る
人間関係の希薄化、自然体験・社会体験の不

足、有害情報の増加や情報操作などによる犯
罪への可能性など、
負の一面ももたあわ
せている。そのため、
情報社会の特性を理
解し、情報化の影の
部分にも対応した適
正な活動ができる考
え方や態度が必要と
なってきた。

無料通信アプリ等
によるいじめ問題
や、面識のない他人
とのトラブル、携帯電話・スマホにかける時
間が増加するネット依存症など、ここ南種子
町においても、身近な問題として危機感をも
っているところである。

各学校では、「情報社会で適正な活動を行う
ための基になる考え方と態度」、いわゆる情報
モラルを各教科や道徳等に位置付け、指導の
体系化と強化に取り組んでいる。
ネットにつながるゲームや音楽機器、携帯
電話・スマホは、親の責任と監督の下におい
て使わせてほしい。今こそ大人が、まず学習
し相互のネットワークを駆使して、ネット社
会を生き抜く子どもたちの育成に取り組む必
要がある。



携帯電話・スマホ教室(保護者・児童対象)

様々な青年団活動を通して

南種子町社会教育委員 松原 洋樹
現在、南種子町連合青年団は約三十人で活

動しています。

主な活動としては、町の行事であるロケッ
ト祭りやふるさと祭り等で、団員手作りの出
店、うどん販売のバザーなどを開いてイベン
トを盛り上げるために積極的に参加していま
す。

最近では、団員数の減少により、団員一人一
人の負担が大きくなっており、みんな
で協力し合い、南種子町を盛り上げるために
一生懸命活動しています。

また、小・中学生のみなさんと活動する際
も、団員がお兄さんお姉さんとして面倒を見
ている姿を見ていると、青年団活動から本人
たちがいろいろなることを経験し、学んでいる
ようにも見受けられます。

この青年団活動は、団員間の交流が図られ
ることがひとつの目的であると思います。メ
ンバー一人一人が抱えている仕事や恋の悩み
から、地域や社会の問題まで幅広く語り、仲
間同士の信頼関係をつくりあげています。

また、南種子の団員との交流はもちろんの
ことですが、熊毛地
区内・県内の青年団
とも交流が行われて
います。特に毎年開
かれる県の青年大会
では、他の地域の青
年団との交流もあ
り、同世代の仲間が
どのようなことを思
い、活動しているの
かを学べるいい機会



「県青年大会」への参加

になっていきます。

このように、青年団活動は、いろいろなイベント・活動を行っていくことにより、青年期におけるひとつの学び・経験の場として重要な機会ではないかと考えます。自主的に何かを進めていく大変さ、仲間と協力して成し遂げた後の達成感を団員に感じてもらえればと思います。

むらづくり運動が、社会教育の原点

屋久島町社会教育委員 大角 利成
これまで、鹿児島県が提唱した農村振興運動の一環としてむらづくり運動が展開されてきました。本町においても、集落毎に五か年を期間とするむらづくり活性化計画が策定され、目標達成のための話し合い活動を基本に実践活動が展開されています。

そのなかで集落役員はもちろん、子ども会から高齢者クラブに至る各種団体等の代表者等からなるむらづくり委員会が組織され、地域の課題解決のための活動が行われています。このことは、集落が社会教育の場であり、集落全員が社会教育指導者でもあると言えます。これからは、地域住民の生活学習を通して学習意欲の高まりに応え、いつでも・どこでも・充実した学習のできる環境整備を図るために多様な学習機会を提供することが、集落リーダーにより一層求められることであろうと思います。

住民が進んで地域社会参加活動を行い、交流・連帯が深まるように、そして体験活動等

を通じた指導者の育成に努め、各種団体の育成強化を図りながら地域社会の連携を深めることが大切かと思えます。

集落毎のむらづくり運動こそが、これからの社会教育の充実を左右すると考えます。人づくりの基本をなす社会教育、明日の時代に備えて集落区長として、社会教育委員として一層精進しなければと心新たにするところです。集落毎に、ことばの違いや文化の違いがあり、また、独特な生活形態からして集落が小さな自治体としての役割を果たしてきたことも事実であり、特徴ともいえるでしょう。



尾之間公民館公民館講座
「唄声キツ茶コーラス」発表

「あいさつ」の習慣化（大人の役割）

屋久島町社会教育委員 尾辻 政博
「ポスターを作ろう」「校内放送で呼び掛けよう」「あいさつができたか、毎日振り返ろう」などは、児童総会で話し合われたあいさつ運動の取組の具体策です。総務委員会は、登校時の朝の立哨に参加し、あいさつ運動を行います。六年生は、小学校最後の締め括りにと、校門でのあいさつ運動に加わります。PTAでは、学校周辺の道路に「あいさつどおり」の看板を設置してくれました。生活指導部は、毎月第一・第三水曜日に校門で子どもたちを迎え入れます。地域の方々も、道路の要所で

交通安全を兼ねて、あいさつ指導をしてください、とても感謝しています。立哨に参加される地域のWさんは、朝の空気に入れるかのように、辺り四方に響く大きな声であいさつをしてくれます。子どもがあいさつを返すと、「君が一番だ。」と、背中を押し、校門へ入れます。

さて、屋久島町では「あいさつ日本一」を掲げ、早や三年になります。年間三十万人とも言われる観光客。観光地としてソフト面での「おもてなし」の心遣いもありますが、何より子どもたちの人間形成の一助にという大切なねらいがあります。毎月「一」の付く日を「あいさつの日」とし、役場職員の方々が道路でのあいさつ運動に取り組んでいます。また、子ども会や商工会等へも呼び掛け、啓発に一生懸命です。「あいさつは『そこにいるあなたをしつかり意識していますよ』という最大の礼儀です。」と、子どもたちに話をしています。地域であいさつができるように学校で学ぶ。「あいさつ」の習慣は、社会人となったとき、自分を豊かにしてくれます。学校・家庭・地域・行政（私たち大人）が一体となって、今後も取り組んでいきたいと思えます。



宮浦小学校でのあいさつ運動

